

07-09 さんぽ事例検討②

インタビュー情報

- 日時：2026-07-09 11:29:53
 - 場所：[ワンステップ]
 - インタビュアー：田中
 - インタビュイー：Speaker 2、Speaker 3、Speaker 4、Speaker 5
-

見解

1. 「お仕事」というワードの活用と意味付け - 田中

- 生活介護における「仕事」概念の導入

生活介護の場で、利用者本人に「お仕事をしに来ている」というイメージを持たせることが、活動意欲の向上につながる可能性があるとして田中は提唱した。遊びや活動であっても「仕事」として意味付けすることで、施設に来る動機が生まれ、できることが増えるのではないかと考えている。職員が地道に「助かった」などの言葉をかけ続けることで、本人の中に仕事意識が育まれることを期待している。

- 「遊び」を「仕事」に転換する支援の工夫

ブラールを組む活動など、本人が楽しんでいる行為を「何かを組み立て完成させるお仕事」として再定義することが提案された。こうした意味付けによって、活動そのものへの取り組み姿勢が変わり、自発的な参加や達成感につながる可能性があるとして議論された。

- 工賃・仕事認識を通じた活動の意味付け（太陽くんの事例）

太陽くんのお兄ちゃんがB型就労支援施設に通っていることから、「仕事に行く」という概念が家族内にある可能性が示唆された。現在太陽くんの工賃はゼロだが、活動に工賃を発生させることで仕事としての意識を持たせることができると考えられている。具体的なワーク内容の写真をお母さんと共有し、「今日はこれをしに行くんだね」と声かけできる環境を整えることが提案されている。

2. 障害区分（A1・A2）の判定と実態についての検討 - 田中、Speaker 4

- **A1判定への疑問とその背景**

田中は、対象者がA1（最重度）と判定されているものの、日常的な自立度から見るとA2レベルに近いのではないかと感じていることを述べた。Speaker 4はこれに対し、福岡市の児童相談所界限では家庭事情等によりワンランク上の区分が付与されるケースがあるという実態を説明した。

- **コミュニケーション面はA1レベルという評価**

日常会話は可能でありながら、感情的になると暴力的な行動が出るという点で、コミュニケーションにおいては最重度（A1）の難しさがあると田中は分析した。機能的な側面と行動・コミュニケーション的な側面を分けて評価することの重要性が示唆された。

3. 日常生活動作（ADL）の状況確認 - 田中、Speaker 2、Speaker 3

- **排泄・おむつ対応の現状**

下剤の使用によりおむつが必要な状況であるが、匂いを感知すれば自分でトイレへ行く自立性もあるとSpeaker 3が説明した。ただし排便後の後始末については、本人が対応を拒否するケースがあることが報告され、家族（お母さん）も困惑していることが示された。

- **着替え・移動・外出の自立度**

着替えは自分でできるが、紙パンツの交換を拒否する場面があるとSpeaker 2が述べた。移動・外出については道路での危険行動があるものの、機能的な問題はなく歩行での移動は可能であると田中がまとめた。意思の疎通や予定管理については難しさがあると評価された。

4. コミュニケーション支援の必要性と具体的方策 - 田中、Speaker 2

- **コミュニケーション困難への支援介入の提案**

言葉を使って会話できるにもかかわらず、うまく伝わらない・受け取れないことで手が出てしまうという状況に対し、田中はコミュニケーションへのサポート強化を提案した。発信・受信の両面でのサポートが整えば、問題行動の低減につながる可能性があると指摘した。

- **「交渉」を活用した支援技術**

「ちょっと待ってね」「後でね」といった言葉による交渉が本人に通じることが確認された。田中はこれを活用し、本人の要求をすべて通すのではなく、一部を受け入れながらこちらからの提案も組み込む「交渉型支援」を提案した。要求の7～8割を認めつつ、残りを調整するアプローチが有効かもしれないと述べた。

- **コミュニケーションカードの活用と限界 - Speaker 2**

以前、本人の言葉に対応した絵カードや単三電池などを用いたコミュニケーション支援が試みられていたことが共有された。しかし、カードが全て切り刻まれてしまった経緯があり、スケジュール表なども含めて破壊された経験から、カードが「命令書」として受け取られてしまっていた可能性が指摘された。本人の意思を叶えるツールとして機能させることの難しさと重要性が議論された。

- **特定職員への依存と関係性の課題**

本人が特定の職員との信頼関係に強く依存していることが示された。また、会話のやり取りが職員にとっては負担になる一方、本人にとっては大切な交流であるというギャップが存在し、それをどのように構造化・調整するかが課題として挙げられた。

5. 太陽くんの現状と課題 - Speaker 3

- **スケジュールの曖昧さが不安の根源である**

現在、太陽くんのスケジュールがふわっとした状態にあり、それが彼の不安の大きな原因となっている。生活介護に行くこと自体はルールとして理解・受容できているが、そこで何をするのかが明確でないため、本人が落ち着けない状況が続いている。職員主体のスケジュールではなく、本人が主体的に選べる仕組みを整えることが重要だと指摘されている。

- **一人で過ごす時間における「手持ち無沙汰」の問題**

現状、太陽くんは一人で過ごす時間が設けられているが、その時間に何をすればよいかが分からず、我慢する時間が増えている。「つまらないな、何かやりたいな」という気持ちが芽生えてきた段階にあり、次のステップとしてスケジュール構築が必要とされている。

6. スケジュールの具体的アプローチ - Speaker 2、Speaker 3

- **本人が選べる3択程度のスケジュール提示**

タブレットで検索する、塗り絵をする、職員と話す時間を持つ、といった選択肢を3択程度に絞り、30分単位で組み立てることが提案されている。本人にヒントを提示しながら選んでもらうことで、主体性を育てることができる。

- **本人主体のスケジュールへの組み替え**

これまでのスケジュール支援が職員と本人の折り合いをつけるためのものになっていたという気づきが共有された。今後は本人が中心となるようにスケジュールを組み替えていくことが目標として語られ、チーム全体での方向性として共有された。

- **集団活動と個別化の違いによる難しさ**

集団生活では周囲の流れや他者が褒められる場面を見て「やってみよう」という動機が自然に生まれるが、個別化するとその流れが機能しにくい。個別スケジュールであっても、全体の流れに合わせた構成にしつつ、本人が少しずつ興味を持てる活動を組み込むことが重要とされている。

7. 興味を活かした活動アイデア - 田中、Speaker 3、Speaker 5

- **箱庭・Nゲージ系工作への関心**

田中から箱庭療法のミニチュアを使った活動が提案され、Speaker 5がNゲージの建物・車・人などを作る動画を太陽くんと一緒に見ていたエピソードを共有した。自動販売機や電車関連の工作にも興味を示していたことから、ジオラマや箱庭的な工作活動が本人の関心に合致する可能性が高いと判断されている。ダンボールや安価な素材での手作り工作も有効と考えられている。

- **多様なアイデアを出し惜しみせず提示することの重要性**

田中が「100個から1個でも使えれば良い」という姿勢でアイデアをどんどん出すよう促した。実際にNゲージ工作、箱庭、塗り絵、検索活動など複数の案が出され、どれが本人にフィットするかを試行錯誤しながら探っていくことが大切とされている。

8. 本人のやりがいと強みを活かした支援 - Speaker 4

- **塗り絵などの作品を通じたやりがいの創出**

作業所の入り口に利用者の塗り絵作品を展示したところ、来訪者から賞賛を受けたという事例が紹介された。このような経験を通じて、本人が「やってよかった」と感じられる機会を作ることが重要であり、自分の行動が誰かに認められるという体験が、仕事へのやりがいや自己肯定感につながる可能性があるとして述べられた。

- **数を数えるなどの得意なことを仕事に結びつける**

本人が数を数えることに一定の力を持っている可能性に触れ、生活介護の場での在庫チェックなど、実際の作業として組み込むアイデアが提案された。得意なことを活かした役割を与えることで、本人の自信ややりがいを高めながら、日常支援の中に自然な形で組み込んでいける可能性があるとしてされた。

9. 母親との連携による承認・褒める機会の創出 - Speaker 2

- **ワーク内容の写真共有による家庭連携の強化**

ワーク内容を写真でお母さんに共有することで、母親が「仕事偉いね」と具体的に褒めやすくなる。現在お母さんはタブレット利用を気にしているため、明確な活動内容を示すことで家庭での会話の突破口にもなる。また、実績が積み重なった際に本人が欲しいものと結びつける仕組み（擬似工賃・ご褒美制度）も検討されている。

- **クリアファイルへの絵の描き込みという実績**

以前の実習時に、本人が好きな絵をクリアファイルに描いて商品化したという経験があった。現在は絵を描かないと言っているが、過去にこうした創作活動への関心と自己表現の実績があることは、今後の活動設計においてヒントになると考えられている。

10. 「できること」を増やすABC分析と強化のアプローチ - 田中、Speaker 2、Speaker 4

- **不適切行動の除去より「できること」の強化を優先**

強度行動障害を持つ利用者に対し、問題行動をなくそうとするアプローチでは成果が出にくいと田中は述べた。代わりに、うまくできた場面・関わり・活動を記録・蓄積し、そこを強化していく方が結果的に前進できるという考えを示した。

- **ABC分析の記録と共有の重要性**

Speaker 4とSpeaker 2は、どのような環境・関わり・活動の時にうまくいったかをABC分析の形で記録することの意義を述べた。問題行動の先行事象を把握することで、他の職員とも情報を共有でき、特に「言葉の行き違い」がきっかけになっていることが明らかになると指摘された。

11. 行動支援とABAの考え方の活用 - 田中

- **枠組みを作ることで双方の負担を軽減する**

「この時間はこの人と話せる」というような枠組みを設けることで、職員側の負担を軽減しながら本人にとっても安心できる交流の場を確保するアイデアが提案された。券を使うなど具体的な仕組みを作り、その時間に限定してコミュニケーションを行う方法が、ABAの実践例として紹介された。

- **強化によるやりがいの形成と療育の本質**

本人の強みを活かした領域を作ることと、やった時に「自分にメリットがある」と感じられる強化が組み合わさることで初めて行動が増えていくという考え方が示された。また、うまくいくことだけが療育ではなく、失敗することも療育の一部であるという視点が強調された。チャレンジを繰り返すことで環境やタイミングを変えながら、本人に合った支援を探し続けることの大切さが語られた。

12. AIを活用した個別支援計画の目標設定 - 田中

• AIによる個別支援計画の目標の具体化

参加者から提供された資料をAIに読み込ませ、長期目標や個別支援計画の目標を「できたかできないかわかる状態」に細分化した事例が紹介された。個別支援計画は6ヶ月～1年スパンで作られるため細かい記述が難しいが、1ヶ月単位の目標としてAIが提示した内容を参考に、職員間で共有しながら「今月はこれでやってみよう」という形で活用できる可能性が示された。

結論

本事例検討では、複数の利用者への支援に関して、「お仕事」としての意味付け、障害区分の実態との乖離、日常生活動作の状況確認、コミュニケーション支援の強化、スケジュール構築、興味を活かした活動設計、家族連携、ABC分析・ABAの活用、そしてAIを用いた個別支援計画の具体化という多角的な視点から議論が行われた。

カード支援の失敗経験を踏まえ、支援ツールは「命令書」ではなく本人の意思を叶えるものであるべきという認識が共有された。問題行動の除去を主目的とするより、できた場면을ABC分析で記録・蓄積し強化していくアプローチが有効であるという方向性で概ね合意された。また、本人主体のスケジュール再構築、得意なことを活かした役割付与、母親との連携強化、そして失敗も療育の一部と捉えてチャレンジを継続することの重要性が確認された。言葉の行き違いによる問題行動への対応として、コミュニケーションサポートの充実が最優先課題として浮かび上がった。

今後の対応

- [[1. 残り時間を使って、利用者が「できること」に関するアイデア出しをグループで行う
- [[2. ABC分析を活用し、うまくいった場面（環境・関わり・活動）を記録・蓄積する仕組みを構築する
- [[3. コミュニケーション支援の具体的な工夫（交渉技術の活用・ツールの再設計など）についてチームで検討する
- [[4. 太陽くん向けに30分単位の選択式スケジュール（3択程度）を作成する（例：タブレット検索・塗り絵・職員との会話）
- [[5. Nゲージ・箱庭・ダンボール工作など本人の興味に合わせた工作活動の素材・環境を準備する
- [[6. ワーク内容の写真をお母さんと共有する仕組みを構築し、家庭との連携を強化する
- [[7. 工賃発生の可能性について検討し、活動に「仕事」としての意味づけを行う

- [] 8. 得意なこと（数を数えるなど）を活かした役割・仕事を生活介護の場に組み込む
- [] 9. AIが作成した個別支援計画の目標案を職員間で共有し、月単位の目標として活用する
- [] 10. 環境やタイミングを変えながら、以前失敗した支援への再チャレンジを検討する

AIからの提案

録音トランスクリプト全体を通じて、以下の点で質問の改善が可能と考えられます。

「食事面は介助はいるんですか」「着替えはどうですか」といった単発的な質問は、回答が断片的になりがちでした。「食事・入浴・着替えそれぞれについて、現在どの程度の介助が必要で、どのような場面で困難が生じているか、具体的に教えていただけますか」のように複数の観点をまとめて尋ねることで、より整理された情報を引き出せる可能性があります。

A1判定に関してSpeaker 4が「家庭事情でワンランクアップ」という重要な情報を提供した際、深掘りがやや少なかったように見受けられました。「その判定が支援計画や日々の関わり方にどのような影響を与えていると感じますか」といったフォローアップ質問を加えることで、判定と実態のギャップが支援現場に与える影響をより深く探ることができたと考えられます。

カードが切り刻まれた経緯やスケジュール支援の失敗について話題に上がった際、「その時、本人はどのような反応を示していましたか？」「その後、職員の関わり方はどう変わりましたか？」といった時系列や感情面を掘り下げる質問があると、出来事の背景や影響をより立体的に把握できたいでしょう。

「どんどん出しましょう、皆さん」という促しは場の雰囲気을活性化する効果がある一方、「太陽くんが一人でも取り組めそうな活動という視点で」のように目的を明示することで、よりの的を絞った意見が集まりやすくなります。複数の参加者が発言する場面では、「〇〇さんはこの点についていかがですか？」のように特定の参加者に意見を求める形で発言を促すと、各職員の異なる視点や経験をより均等に引き出すことができ、議論の質がさらに高まると思われます。